

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書【総括】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| 推進地区名 | 協力校名 | 児童生徒数 |
|-------|-------|-------|
| 鹿沼市 | 東小学校 | 756 |
| 塩谷町 | 玉生小学校 | 194 |
| 足利市 | 毛野小学校 | 605 |

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 「とちぎっ子学力アッププロジェクト」の推進について

i とちぎっ子学習状況調査

- ・ 調査の実施日：平成28年4月19日（火）
- ・ 参加校数：538校、参加人数：50,136名
- ・ 調査結果送付：平成28年6月30日に各小・中学校及び各市町教育委員会に送付

ii 学力向上アドバイザー派遣事業

とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や、学習指導における検証改善サイクルの確実な構築・運用の促進

10名のアドバイザーを179校に派遣、延べ派遣回数895回

iii 調査結果活用研修会

調査結果の分析や結果から明らかになった課題を踏まえ、今後の指導に生かす方法等に関する研修会を全校悉皆で実施

平成28年7月11日（月） 参加校数538校、参加人数568名

iv 市町教育委員会の指導主事を対象にした説明会の実施

- ・ とちぎっ子学習状況調査結果活用説明会 平成28年7月1日（金）
- ・ 全国学力・学習状況調査結果活用説明会 平成28年10月3日（月）

（※各市町の学力向上に関わる取組をまとめ情報の交換を図った）

v パワーアップ講座を県内3箇所で開催

全国学力・学習状況調査の結果から教科に関する課題を把握するとともに、その課題の改善に向けて教師の指導力の向上を図る研修会の実施

平成28年10月29日（土）、11月5日（土）、11月19日（土）

参加者222名（小学校：154名、中学校：33名、市町教育委員会：35名）

vi 教師用指導資料の作成・配布

- ・ 教師用資料「言語活動の充実を図る3つの提案」：15,000部
- ・ 平成28年度全国学力・学習状況調査結果資料：2,000部
- ・ 学力向上実践事例集：6,500部
- ・ 「パワーアップシートとその使い方」：14,000部

vii 保護者用リーフレットの作成・配布

- ・ 小学校：40,800部、中学校：20,900部

viii 学力向上研究協議会（学力向上検証委員会）

とちぎっ子学力アッププロジェクト等の施策を検証し、今後の学力向上に関わる施策等について協議し、県教育委員会が実施する学力向上対策の改善に資するための協議会を開催

| | | |
|-----|---------------------------|-----------------------|
| 第1回 | 平成28年9月8日（木） | 本県の学力向上対策の検討 |
| 第2回 | 平成28年12月5日（月） 12月6日（火） | 優れた実践をしている小学校及び中学校の視察 |
| 第3回 | 平成29年1月31日（火） | 本県の学力向上対策の検証 |

2. 推進地区における取組

（1）鹿沼市における取組

- i 指導体制の構築
- ii アドバイザー（大学教授）の配置
- iii 協力校校内研修への指導・助言
 - ア 本研究の概要の説明
 - イ アドバイザーによる講話
 - ウ 授業づくりにおける指導・助言
- iv 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施
- v 平成28年度全国学力・学習状況調査における調査結果の分析
- vi 先進地域への視察

（2）塩谷町における取組

- i 塩谷町学力向上推進委員会幹事会の開催
- ii 塩谷町学力向上推進委員会ワーキンググループの開催
- iii 塩谷町学力向上推進研究校の指定
- iv 塩谷町放課後学習支援事業の実施
- v 塩谷町総合学力調査の実施
- vi 学校・家庭・地域の連携充実に向けた取組

（3）足利市における取組

- i 先進校の視察
- ii 市教育委員会、県教育委員会の指導主事による指導案検討及び授業研究会
- iii 各学年ブロックによる研究授業

iv 授業公開（年2回、2日間の開催、1人1回の研究授業の実施）

3. 協力校における取組

(1) 鹿沼市立東小学校における取組

- i 授業改善や指導力向上のための校内研修の充実
 - ア アドバイザー（大学教授）による講話
 - イ 授業改善の視点の明確化
 - ウ 「学び合い」を通じた思考力・表現力の育成
- ii 全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施
- iii 算数を専門とする教員による授業の実施

(2) 塩谷町立玉生小学校における取組

- i 心の育成
- ii 学ぶ意欲の向上、学習習慣
- iii 学びの質の向上

(3) 足利市立毛野小学校における取組

- i 指導方法・指導体制の工夫改善
 - ア 全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査、本市独自の調査等の結果を踏まえた授業改善や指導の充実
 - イ 個に応じた指導による指導方法・指導体制の工夫改善
 - ウ 言語に関する授業規律や学習規律の実践
 - エ 保護者との連携
- ii 教師の資質能力の向上【自学自習：足利学校の精神】
 - ア 授業を自ら改善しようとする主体性（※訪問研修）
 - イ 自らの課題を踏まえ、他から学ぼうとする受容性（※訪問研修）
 - ウ 教材に対する理解を深めようとする専門性
 - エ 1時間の授業から年間を通して行おうとする継続性

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 鹿沼市立東小学校における取組の成果

- i 「深い学び」の実現に向けた授業改善について
本実践のような視点をもって授業改善を図っていくことにより、児童の学びの質が高まり、学びが深まった。
- ii 「学び合い」を通じた思考力・表現力の育成について
「学び合い」が、自分の考えの発信等などの表現の技能を身に付ける場ではなく、考えを深め広げるという視点での授業構想であることから、児童の思考力育成を目的とした授業づくりとしては、教員の理解という面で一定の成果が得られた。
- iii 算数を専門とする教員による授業の実施
授業づくりでは、教材が持っている算数・数学的な価値を見出し、児童の学習が深い学びとなるための授業展開を構想することができた。

このような授業づくりを校内研修を通して実施し、リフレクションしていくことにより、協力校内での授業づくりの一般化が図れた。

(2) 塩谷町立玉生小学校における取組の成果

i 心の育成

11月に行ったQ U調査において、6月に比べて各クラスの友達関係が改善され、とてもよい関係が築けているという結果だった。クラスの中での自己肯定感が高まった。

ii 学ぶ意欲の向上・学習習慣の確立

児童のアンケート結果から、それぞれの学年で平日の学習時間が増加している。保護者アンケートでも「家庭学習が習慣化するように働きかけたり環境整備したりしている」というような肯定的な回答が見られるようになるなど、保護者の意識も高まりつつある。

iii 学びの質の向上

「授業で扱うノートには、学習の目標とまとめを書いている」「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の項目で、「はい」と回答する児童の割合がどのクラスでも増加した。

朝読書や親子読書などの推進により、学校での読書習慣は定着し、学級文庫の利用や休み時間での読書など本に触れる機会が増えた。

研究授業の実施や、授業後の熱心な研究協議、学力向上担当指導主事による助言により、教員の意識が高まり、日々の授業実践に生かされている。また、県外の先進校を見学するなど研鑽を重ね、授業力向上に向けて積極的に取組む姿勢が見られた。

(3) 足利市立毛野小学校における取組の成果

i 指導方法・指導体制の工夫・改善

実践校で学んだ「参考となった実践等」を日々の授業の中で生かすことにより、課題解決に向けた授業実践がより一層意識化されている。また、日々の取組が主体的に学ぶ態度の育成につながっている。

県教育委員会や市教育委員会など、多くの指導主事による学校訪問の機会が増え、指導主事と教員との関わりが多くなり、指導方法の改善につながった。

教員一人ひとりの実践を基に、学校全体で「毛野小ベーシック」をまとめ、学校課題の解決に向けた組織的な取組につながっている。

ii 教師の資質能力の向上【自学自習】

研究主題に基づいて、教師各自が個人の課題を設定し、実践研究に取り組んだ。

課題を解決するために実践校への訪問をし、研究授業や授業研究会を通して指導法等について直接学ぶことができた。

実践校における課題解決に向けた考え方や具体的な手立てを学ぶことで、教師の指導意欲が向上した。

2. 実践研究全体の成果

全国学力・学習状況調査結果やとちぎっ子学習状況調査結果を関連付けた分析の充

実が図られた。また、県教育委員会の指導主事が指導案検討や授業研究会において指導・助言を行ったり、市町教育委員会の取組を参観したりすることを通して、市町教育委員会との連携強化を図ることができた。

本研究の目的の1つである、「自分の考えを書く活動の習慣化」及び「ねらいの提示・振り返る活動の充実」などの授業改善の視点について、授業研究会等を通して周知・徹底することができた。

3. 取組の成果の普及

推進地域では、学力向上アドバイザー派遣事業や研修会等で全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査の調査問題を効果的に授業に取り入れたり、計画的に単元末等で児童生徒に取り組ませたりするよう啓発した。

また、調査問題の適切な活用を図るためのリーフレット「パワーアップシートとその使い方」を公立小・中学校の全教員に配布した。

推進地区では、研究授業を公開したり、啓発資料を作成したりすることで、取組の成果の普及を図った。

○ 今後の課題

- ・ 平成29年度全国学力・学習状況調査や平成29年度とちぎっ子学習状況調査等の結果の詳細な分析・検証
- ・ 本実践研究や調査結果から明らかになった課題解決に向けた取組への支援（実践研究）
- ・ 県ホームページ等による推進地区、協力校における有効な取組（成果）の積極的な周知
- ・ 家庭学習の習慣化や望ましい生活習慣の育成に向けた保護者への啓発

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|-------|-----|
| 推進地区名 | 鹿沼市 |
|-------|-----|

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

主体的・対話的で深い学び, いわゆる「アクティブ・ラーニング」の視点から授業を質的に改善し, 算数科における思考力・表現力を育成する。

2. 研究課題への取組状況

(1) 指導体制の構築

大学の研究者や県教育委員会担当者, 協力校の研究リーダー, 市内研究学校のリーダー, 及び市教育委員会の担当による「学力向上推進協議会」を設置し, 研究の方向性や研究の評価等を協議したり, 協力校への指導・助言をしたりしていくこととした。

- ・研究の方向性及び内容の検討
- ・協力校課題推進委員との研究の方向性及び内容の検討
- ・研究内容の確認
- ・研究授業及び公開研究授業参観
- ・協力校における研究課題への取組状況の確認
- ・協力校第5学年児童を対象とした学力調査の分析結果の検討と, 研究の評価の検討

(2) アドバイザーの配置

協力校と日常的に連携, 協力しながら学力向上に対する指導・助言を専門的な観点から行うためのアドバイザーを配置した。

- ・アドバイザー：宇都宮大学教育学部准教授 牧野智彦先生

(3) 協力校校内研修への指導・助言

本研究では, 「主体的・対話的で深い学び」いわゆる「アクティブ・ラーニング」の視点から, 授業を質的に改善し, 児童の思考力・表現力を育成していくことを研究の主目的としている。そこで, この視点に焦点化して, 校内研修への指導・助言をしていくこととした。

ア 本研究の概要の説明

協力校の全教員を対象に, 研究の趣旨や研究の指導体制, 鹿沼市及び協力校の学力に関する現状と課題, 研究課題, 取組内容, 成果等の把握と検証の手立て等について説明した。

イ アドバイザーによる講話

研究を推進するにあたり、学習指導要領改訂の方向性や新しい時代に必要とされる資質・能力について、算数科で期待される思考力・表現力について、さらにそれを育成していくための授業改善のポイントを、教員が理解し整理していくことが大切であると考え、アドバイザーによる講話を実施した。

アドバイザーからは、中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」をもとに、必要な資質・能力の要素(三つの柱)や、アクティブ・ラーニングの意義等について説明がなされた。算数科に関わることについては、具体例とともに、数学的な考え方や数学的表現力、学び合う算数について示された。

ウ 授業づくりにおける指導・助言

本研究における授業づくりについては、指導者が授業を構想する段階から関わり、協力校とともに実施していくことを基本とした。

| | 実施日 | 内容 | 学年・教材等 | 指導者 | 協力校及び参観者 |
|---|------------|-----------------|--|---|--------------------|
| 1 | 2016/10/14 | 授業の構想 指導案検討 | 第1学年 「12-9と12-3の けいさん」 | 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 大貫雅子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 第1学年担当教員 課題推進委員 |
| | 2016/11/16 | プレ授業 授業研究 | | 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 第1学年担当教員 課題推進委員 |
| | 2016/11/17 | 研究授業 授業研究会 | | 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 大貫雅子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 全教員 |
| 2 | 2016/12/9 | 授業の構想 指導案検討 | 第5学年 「工夫して計算しよう」 (平成26年全国学力・学習 状況調査【算数B】問題 の授業化) | 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 大貫雅子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 第5学年担当教員 課題推進委員 |
| | 2017/1/12 | プレ授業 授業研究 | | 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 第5学年担当教員 課題推進委員 |
| | 2017/1/20 | 公開研究授業 授業研究会 | | 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 大貫雅子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 全教員 他校参観者27名 |

授業づくりにおける授業を構想する段階では、まず、授業のねらいが思考力を育成する授業なのか、あるいは表現力を育成する授業なのかを明確にする必要があると考えている。よく見かけるのは、本時のねらいに「〇〇について考え、それを説明することができる」といったものである。思考力の育成をねらいとする授業であれば、帰納・演繹・類推などの数学的な考え方をどのような手立てを講じて育成するのかを明確にしなければならないであろう。また、表現力の育成をねらいとする授業であれば、「説明する」とは「ものごとをよく分かるように工夫して述べることである」ため、「分かるように」、
「工夫して述べる」ことをポイントとして、議論する必要がある。一単位時間の中でこれらのことを扱うには無理があるため、まずは、授業のねらいを明確にするということを、この段階の最初に指導した。



授業づくりの様子

次に、本研究の目的は、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善であるため、授業が児童の「深い学び」となっているかどうかという点が重要であると考えている。「深い学び」の鍵となるのは、「見方・考え方」であり、習得・活用・探究という学びの過程の中で、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが実現できるかがポイントとなるであろう。そのためにも、この段階において、児童が算数的活動を行うことによって、学びがどのように深まるかを明らかにしておく必要があり、指導の大切なポイントとした。

さらに、「対話的な学び」については、子供同士の協働、教員等の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることが実現できているかが重要である。

学び合いによる算数の授業の要件としては、「もっと簡潔にできないか、もっと明確にできないか、もっとまとめられないか」という、算数に関わるよりよいものを創りだそうとする「問い」を持たせる必要がある。また、その「問い」を解決するために、算数的活動に従事する。さらに、互いの意見に耳を傾け合い、どんな意見でも「それは本当か」を自分たちで確かめ合って、疑問が残れば、それをさらにみんなで考え合う、という活動を行う必要がある。

このような視点から、授業の展開をとらえ直し、授業を構想していくことが肝要であり、指導のポイントとした。



研修会の様子

(4) 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施

市内小中学校教員を対象とし、協力校の研究内容やその成果を発表する場としての研修会を開催した。

| 実施日 | 内容 | 学年・教材等 | 授業者・指導者等 | 参観者等 |
|-----------|---------------|--|--|----------------------------|
| 2017/1/20 | 公開授業 授業研究会 | 第5学年 「工夫して計算しよう」 (平成26年全国学力・学習状況調査【算数B】問題の授業化) | ○授業者 鹿沼市立東小学校 狐塚智子教諭 秋澤貴之教諭 ○指導者 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 大貫雅子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 | 東小学校教諭 市内小中学校教諭 計70名 |
| | 講話 | 「数学的な思考力・表現力を目指した算数の授業づくり」 | ○講師 宇都宮大学 牧野智彦先生 | 市内小中学校教諭 計30名 |

(5) 平成28年度全国学力・学習状況調査における調査結果の分析

協力校第5学年児童を対象に、平成28年度全国学力・学習状況調査 教科に関する調査[算数A]、[算数B]を実施し、その解答状況を平均正答率や、無解答等から分析し、研究の成果や課題について、明らかにした。

(6) 先進地域への視察

| 実施日 | 研究会等 | 内容 |
|------------|---------------------------|--|
| 2016/10/22 | 学力向上フォーラム (秋田県横手市) | アクティブ・ラーニングの視点から秋田の探究型授業を学び、今後の研究の参考とする。 |
| 2016/10/23 | 小学校算数教育研究全国大会 (秋田県大仙市) | 授業の省察や協議並びに講演に積極的にに関わり、秋田型授業に触れ、これまでを振り返り、課題を探り、算数教育を進展させるための新たな契機とする。 |

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 第5学年児童を対象とした平成28年度全国学力・学習状況調査 調査問題の実施から

[算数B]では、**3**「日常生活の事象の数学的な解釈と根拠の説明(メダルづくり)」の問題に課題が見られた。特に設問(2)では、平成28年度の全国平均正答率に対して、9.2ポイント低かった。本設問は、「示された情報を基に必要な量と残りの量の大小を判断し、その理由を言葉と数を用いて記述すること」が出題のねらいであった。誤答の多くは、正方形を縦に4個かけることを式で示すことはできているが、厚紙に正方形を24個かけることを示すことができなかった。

一般に、ある事柄が成り立つ理由を説明する場合、説明対象となる事柄の根拠が示すこと、その根拠に基づいて事柄の成り立つことを指摘することの両方が求められる。すなわち、「○○であるから、△△である」の形式で表現される前半部分と後半部分の両方が必要であり、今回の課題は、この後半部分の指摘が不十分であった。

表現力育成に当たり、算数科における説明には3つのタイプがあり、そのタイプの特質に沿った説明方法を指導していく必要があると考えている。

また、**2**(3)、**5**(1)の記述式の設問において、無解答率が約20%あった。無解答については、解答内容が想起できなかったのか、設問の意図が理解できなかったのか、そもそも記述式の問題に対して課題解決の意欲が不足しているのか等、詳細な分析が必要であると考えられる。今後は、その要因に応じた対応策を講じていきたいと考えている。

(2) 協力校教員の変容

ア アドバイザーによる講話から

協力校の教員のアンケートから以下のような感想がもたらされた。

- ・今後必要となる資質・能力について、具体的な三つの柱を理解することができた
- ・アクティブ・ラーニングの意義等について学ぶことにより、ただ単に活動がアクティブになればいいのではなく、深い学びになるような学習が実現できているかが大切であることがわかった
- ・算数科における思考力、表現力とは何かについて、具体的に理解することができた
- ・「学び合う算数」が示され、ペアやグループでの考えの伝え合いが学び合いではなく、互いの意見に耳を傾け合い、どんな意見でも「それは本当か」を確かめ合って、疑問が残れば、それをみんなで考え合うことが大切であるとわかった

アドバイザーによる講話は、中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」をもとに、新しい時代を見据え、これからの時代に必要となる資質・能力についてや、数学的な思考力・表現力についての基本的内容を、研究の初期段階で、協力校の教員が理解することが目的であった。以上のような感想からも目的が十分に達成され、研究推進に向けての意欲の高揚につながったと考えている。

イ 授業づくりから

授業づくりにおいては、授業を構想する段階からアドバイザーを含む指導者が関わることを基本として実施した。

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善のポイントが事前に示されていたこと、協力

校の教員が、講師の講話等によりそれらのことについて理解していたこと等から、意味のある授業づくりとなった。

また、本時の授業のねらいを思考力または表現力のどちらかに焦点化することで、それを育成していくための手立てとして有効な算数的活動を位置付けながら授業の展開を考察することができた。

全国学力・学習状況調査問題を授業化することについては、まず、出題の意図、授業のねらい、学習活動、授業時数等を授業づくりの視点とし、授業づくりに望んだ。学力調査のB問題は、基本的には説明問題が出題されている。説明の対象が「根拠・理由」である問題を、思考力育成の面から授業化したが、前述した授業づくりの視点を明確にしていくことの重要性を実感した。

以上のような試みにより、協力校教員の授業づくりへの考えの変容が見られ、授業を構想していく力が育成されつつあると考えている。

(3)研究内容の一般化に向けて

研究内容の一般化に向け、研修会を実施した。今回の研修会では、協力校で実践した授業づくりの基本的な考えを市内の小中学校に伝えることを目的としたものであった。そのため、アドバイザーによる「算数の授業づくり」の講話を実施した。

参会者からは、授業を構想するに当たって、授業のねらいの焦点化や、数学的に考えること、数学的に表現することなどについてしっかりと考えていくことの大切さについての感想が寄せられ、目的に沿った研修会が実施できたと感じている。

4. 今後の課題

(1)児童の数学的思考力、表現力を育成していくための学習指導の推進

平成28年度は、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善や、授業づくりのポイントについて、教員が理解していくことを中心に研究を進めていった。

平成29年度は、これらを実際の授業でどのように実践していくかといった具体的な学習指導について研究を深めていこうと考えている。

(2)協力校の研究の取組内容への具体的な指導助言

平成28年度協力校では、本研究における取組の一つとして、授業改善や教員の指導力向上のための校内研修の充実を図っていった。

本研究は、年度途中からの開始であったため、協力校の努力する課題の推進計画に沿って研究を展開してきた。研究を進めながら協力校の努力する課題と本研究の課題とのずれを修正しながら取り組んできたが、十分に修正することはできなかった。

平成29年度は、校内研修の中で、計画の段階から研究課題との整合性を図り、推進していきたいと考えている。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 28 年度委託事業完了報告書

【推進地区】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|-------|-----|
| 推進地区名 | 塩谷町 |
|-------|-----|

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「学校の取組を中核とした、家庭・地域との連携を図った学力向上策の確実な実践」
人口減少や少子高齢化の顕著な本町にとって、将来の町を担う子どもたちの生きる力や学力を高めることは喫緊の課題であり、学校と家庭・地域がそれぞれの役割を果たし、連携・協力することで、さらに効果が上がるものと考えている。

町内の各小中学校では、それぞれに学力向上プランを作成し、子どもたちの学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させ、それらを活用して思考力や判断力、表現力を育成するための授業づくり、地域人材の活用、体験を重視した学習活動や探究活動の推進、読書活動の充実など、学校や地域の特色を活かしながら、学力向上の取組を進めている。

これらを一体化させた「塩谷町の将来を担う子どものため、学力を高めましょう」として、「心の育成」「学ぶ意欲の向上」「学びの質の向上」の3つの視点で学力向上の取組を整理することで、町全体で学力向上の機運を高めることとしている。

2. 研究課題への取組状況

本町では、塩谷町総合学力向上推進事業として、全町的な取組を実践してきた。

(1) 塩谷町学力向上推進委員会幹事会の開催

学校関係者以外からの意見を得るための第三者委員会「塩谷町学力向上推進委員会・幹事会」を組織し、学校訪問や学力向上策の調査・協議などを通して、「学校の取組」「家庭・地域の提言」へ意見を集約し、町の取組やワーキンググループ協議の方向性を示してきた。

(2) 塩谷町学力向上推進委員会ワーキンググループの開催

学校関係者からなる学校関係者委員会「塩谷町学力向上推進委員会・ワーキンググループ」を組織し、幹事会からの意見を受け、各種調査や具体的な取組について協議し、学校、家庭、地域に向けた啓発資料の作成などを行ってきた。次年度当初に、周知資料を発行する予定である。

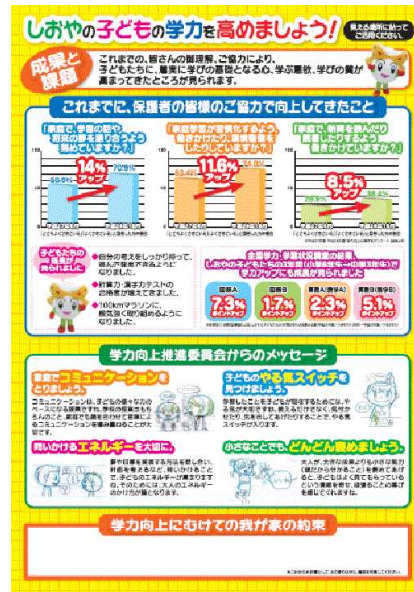


写真：ワーキンググループ会議

【平成28年度発行リーフレット】



資料：リーフレット（表面）

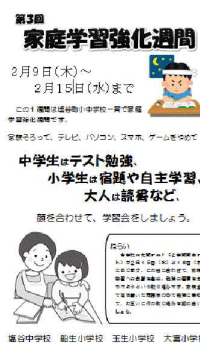


資料：リーフレット（裏面）

(3) 塩谷町学力向上推進研究校の指定

本実践研究の協力校として塩谷町立玉生小学校を塩谷町学力向上推進研究校に指定し、学校、家庭、地域の一体的な取組を特に重点的に行い、その成果や課題を町全体に広められるよう研究を委託した。

その結果を、学力向上幹事会、同ワーキンググループの協議の際の重要な意見として扱い、町全体の共通重点取組内容とした。特に、「町一斉読書週間の設定」「小中連携による家庭学習習慣の実施」「ノーメディアチャレンジシートの重点的活用」を進めるなど、全町的な取組を行ってきた。



資料：家庭学習強化週間



資料：ノーメディアチャレンジシート

また、年間2回の研究授業及び教育委員会事務局職員の支援訪問を実施し、学校での取組と家庭・地域と連携した取組について、指導助言を行ってきた。

加えて、学力向上講演会を開催し、早稲田大学教職大学院 田中博之教授の講話を聴講することで、言語活動を有効活用した活用型の授業の展開について、有意義な示唆が得られた。



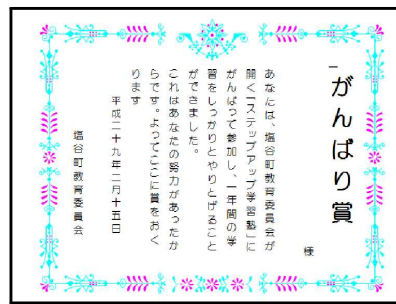
写真：学力向上講演会

(4) 塩谷町放課後学習支援事業の実施

平成28年度より、基礎・基本の定着に課題を有する児童を主たる対象として、塩谷町放課後学習支援事業「ステップアップ学習塾」を、全小学校で実施し、年間25回程度ずつ放課後学習を行ってきた。いずれの会場においても、基礎学力の補充と学ぶ喜びを実感させることに結びついた。全教室ともに、全員が全課程を修了することができたため、教育委員会作成の「がんばり賞状」を発行し、意欲の向上と継続に向けた取組とした。



写真：放課後学習「ステップアップ学習塾」



資料：「ステップアップ学習塾」がんばり賞

各会場の指導者に対する研修を実施の上、支援訪問と併せて実施状況を確認することで、より効果的な学習指導がなされるよう指導・助言を行ってきた。

(5) 塩谷町総合学力調査の実施

年度末に中学3年生を除く全児童生徒を対象に塩谷町総合学力調査を実施の上、町学力調査結果説明・研修会として学力把握と取組の検証を行って、さらなる支援策を検討してきた。

(6) 学校・家庭・地域の連携充実にに向けた取組

学校を中核とした取組を周知したり、家庭・地域から協力を得るたりするための、年間を通じた小中一貫した取組などを、塩谷町学力向上推進委員会幹事会及び同ワーキンググループにおいて協議し、実践してきた。教職員の研修する姿も広報周知してきた。

また、地域人材を利活用するために、町の地域教育力活性化事業（教育委員会事務局生涯学習課主管）とも連携しながら、年間78件の地域との連携を図った事業が行われた。



写真：3年生理科「昆虫の生活」



写真：4年生社会「昔の生活」

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査による学力の把握

全国学力・学習状況調査の平均正答率の経年変化により把握した。その結果、これまでの取組と併せて、平成25年度の小学6年生の平成28年度中学3年生の経年変化は、国語A,B、算数(数学)A、Bともに向上が見られた。

(2) 学力向上推進委員会における推進指標の点検

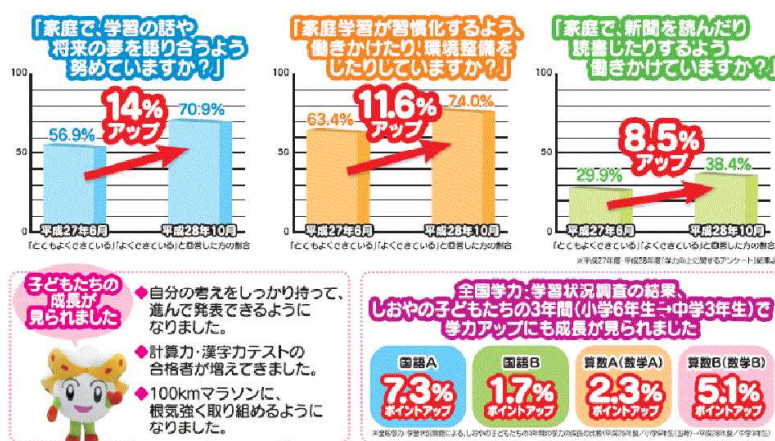
本町の学力向上の課題に基づく10の推進目標に対して、保護者、教職員、児童生徒に対する推進指標を設定し、経時変化を確認した。その結果、保護者のコミュニケーション意識や学習環境整備への働きかけの高まりが見られた。また、教職員の授業の質的改善への取組や切磋琢磨など、様々な意識の向上が見られた。

(3) 放課後学習支援事業における参加者率の推移

放課後学習支援事業の参加児童の出席統計をとり、全員がほぼ毎回参加し、無事に修了することができた。授業で活躍する様子など、指導者からよい傾向が見られるとの報告が得られている。

(4) 家庭との連携の把握

家庭の理解協力に関する意識調査を実施し、本研究事業の効果を把握するため、経時での変化を検証した。成果と課題の双方があることが把握できた。



資料：連携の状況把握資料

4. 今後の課題

1年次の取組からの課題は、授業の質的改善と家庭の理解協力の更なる促進である。今年度の取組を継続しながら、次年度は下記の2点を重点的に取り組んでいく必要がある。

・授業の質的改善

活用型の授業展開を進めるため、カリキュラムマネジメントを進めると共に、言語活動を用いた協働的な学びとなるよう学年間の系統性を図る研究を進める。

・家庭の理解協力の促進

読書活動を更に進めたり、メディア媒体との適切な接し方の向上を図るため、児童生徒と保護者双方に理解啓発を進める。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 2 8 年度委託事業完了報告書

【推進地区】

| | | | |
|-------|-----|----|-----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 0 9 |
|-------|-----|----|-----|

| | |
|-------|-----|
| 推進地区名 | 足利市 |
|-------|-----|

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

(1) 分かる授業の展開

ア 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の充実を図る。

- ・ 児童生徒の実態を踏まえた指導内容の重点化
- ・ 1 単位時間のねらいの明確化
- ・ 板書の工夫
- ・ 補充学習の充実
- ・ 振り返り活動による学習内容の確実な定着
- ・ ねらいに関する達成状況の確認と評価

イ 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の充実に努める。

- ・ 各教科・領域、各学年相互の関連を図った系統的、発展的な指導計画の作成
- ・ 体験的な学習・問題解決的な学習、探究的な活動の充実
- ・ 一人思考の時間の確保
- ・ 学び合いの場の設定
- ・ 「総合的な学習の時間」と各教科等との関連を図った学習活動
- ・ 観察・実験・レポート作成・論述・記録・要約・説明など、知識・技能を活用する言語活動の充実
- ・ I C T 機器の効果的な活用

ウ 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫に努める。

- ・ 導入の工夫
- ・ 発問の工夫
- ・ 児童生徒一人一人の実態に応じて目標をもたせることによる意欲の喚起
- ・ 学習規律の明確化
- ・ 「学習の手引き」等を活用した家庭学習の指導

エ 教材研究を重視し、日常の授業研究の充実に努める。

- ・ 児童生徒の実態を踏まえた教材研究と授業評価の実施

- ・ 地域の自然や文化財等の教材化、人と学び合う活動の推進
- オ 児童生徒一人一人のよさや可能性を多面的、継続的に把握し、児童生徒一人一人を生かすきめ細やかな学習支援に努める。
 - ・ 少人数指導やティームティーチングの充実
 - ・ 児童生徒一人一人の実態に即した個別指導の充実

(2) 学びの成長の把握

- ア 児童生徒一人一人の学習の習得状況を捉え、次の学習に生かすための方法を工夫し、学習内容の確実な定着に努める。
 - ・ 共感的な理解に基づいた事前・事中・事後の評価の工夫
 - ・ 自己評価能力育成のための評価方法の工夫
 - ・ 家庭学習状況の把握、各種たよりによる啓発の推進と習慣化
- イ 基礎・基本の定着と学力の向上に向け、学習指導の改善のために、テストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果分析、活用に努める。

(3) 共に学び合う人間関係づくり

- ア 児童生徒一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級づくりに努める。
- イ 意欲をもって学習に取り組めるような学習環境づくりに努める。
- ウ 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくりに努める。

2. 研究課題への取組状況

①研究課題に対する具体的な取組について

- ・ 教師一人一人が、学校・学級等の実態を分析し、課題解決のヒントを得るために、自分で先進校を視察し、持ち帰ってきたものを、授業に取り入れ、他の教師に提案していく。
- ・ 全職員が視察を行い授業研究を行う際、市教委、県教委の指導主事が、事前の指導案研究に参加し、タイムリーに指導助言を行った。
- ・ 月に数回程度指導主事が訪問し、授業参観や指導助言を、随時行った。
- ・ 研究授業を各学年ブロックで実施し、授業研究会に担当指導主事が参加し、話し合いを活発に行った。

② 成果発表会や研修会等の開催、実践事例集の作成について。

- ・ 半年で2回、2日間の日程で、授業公開を開催し、一人一回必ず研究授業を行った。
- ・ 研究授業を地域に公開し、市内の教職員、地域の方々など、多くの人に公開した。
- ・ 職員一人一人が自分なりに課題を持ち、課題解決のために、先進地視察を行った。(一人1回～3回)

3. 実践研究の成果の把握・検証

- ・ 全国学状況調査等の分析での検証 (予定)
- ・ 市内実施のテストバッテリーの分析の検証 (予定)

- ・毛野小の共通の課題である、コミュニケーション力を育てるについては、授業改善の取り組みの中で着実に進歩が見られた。
- ・アンケート等によるデータの集計は、2月の現職教育の全体会以降に実施予定
- ・教員、児童、学校全体でコミュニケーションをとる場面が増え、学校全体に活性化が見られた。

4. 今後の課題

- ・すべての職員が、それぞれの先進校から持ち寄った取組を、いかに全職員にフィードバックするかが課題。
- ・授業研究において、小、中、高の各ブロック以外の授業が見られないので、情報を共有する方法の工夫が必要。
- ・普段の授業への定着、日常的な取組にするための工夫が必要。
- ・種をまいた状態から、いかに浸透させるかが課題である。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|-------------|
| 協力校名 | 栃木県鹿沼市立東小学校 |
|------|-------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成27年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、協力校の平均正答率と全国とを比較すると下の通りである。

| | 国語A | 国語B | 算数A | 算数B |
|-------------|------|------|------|-------|
| 全国の平均正答率との差 | -2.0 | -6.9 | -6.0 | -10.1 |

知識・技能とともに、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実施し、評価・改善する力などのいわゆる「活用」する力に課題がある。

また、算数Bの記述式問題に対して、全国と比較すると平均4ポイント以上無回答率が高いといった課題もあり、児童の思考力・表現力育成が喫緊の課題となっている。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業改善や指導力向上のための校内研修の充実

ア アドバイザーによる講話

「児童が『学び合う』算数授業の創造 ～数学的な思考力・表現力の育成を目指して～」

「算数の授業づくり」

イ 授業改善の視点の明確化

数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうなどの「深い学び」が実現できているかといった視点からの授業改善を試みた。

実践例：第1学年「12-9と12-3のけいさん」

ウ 「学び合い」を通じた思考力・表現力の育成

子供同士の協働による対話を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」を通して、児童の思考力・表現力を育成することを目的とした授業づくりを試みた。



アドバイザーによる講話



「12-9と12-3のけいさん」授業の様子

実践例：第5学年「計算法則の解釈と説明(計算のきまり)」

(2)全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施

全国学力・学習状況調査の教科に関する調査【算数B】の問題を授業化し、実践した。

- ・平成26年度「計算法則の解釈と説明(計算のきまり)」
- ・平成28年度「きまりの発展的な考察(面積調べ)」



「計算法則の解釈と説明」授業の様子

(3)算数を専門とする教員による授業の実施

第6学年児童を対象とし、トピック的な教材を用い、算数を専門とする教員による授業を実施した。

- ・東京書籍 「震災の経験を生かそう」
「かたちであそぼう」(紙を切って)
「考える力をのぼそう」(全体を決めて)

3. 取組の成果の把握・検証

(1)「深い学び」の実現に向けた授業改善について

算数科における授業改善のポイントは、「児童が算数的活動を行い、学びがどのように深まるかを明らかにする」ことであった。

第1学年「 $12 - 9$ と $12 - 3$ のけいさん」の授業では、問題を減加法及び減々法でそれぞれ解き、それを減数の面から比較検討をする算数的活動を通して、それぞれの解決方法のよさを感じ得ることによる「深い学び」の実現であった。

通常、本単元の授業は、減加法及び減々法の計算の仕方を学び、「どちらの方法でもいいですよ」といった形で、習熟を図る学習展開が予想される。しかし、本実践のような視点を持って授業改善を図っていくことにより、児童の学びの質が高まり、学びが深まっていくと考えている。

(2)「学び合い」を通じた思考力・表現力の育成について

第5学年「計算法則の解釈と説明(計算のきまり)」の授業は、平成26年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査【算数B】の問題を授業化したものである。

この問題は、積に同じ数字が並ぶ計算からきまりを見出し、式を変形することで、より簡単な計算の仕方を考えるものであることから、思考力の育成にあたっては、根拠となることを明らかにしたり、仮定されたことを基にしたりして、筋道立てて考えることが大切である。

そこで、本時では、これらのことが自力解決では難しいと考え、ペアやグループによる「学び合い」により、解決が図られるよう授業展開を考えた。

「学び合い」が、自分の考えの発信等などの表現の技能ではなく、考えを深め広げるという視点での授業構想であることから、児童の思考力育成を目的とした授業づくりとしては、教員の理解という面で一定の成果が得られたと考えている。

(3) 算数を専門とする教員による授業の実施

算数を専門とする教員においては、算数における専門的な指導の充実や、学習を多面的・多角的な視点から俯瞰できるといった利点を生かした授業が可能であると考えている。そのため、授業づくりでは、教材が持っている算数・数学的な価値を見出し、児童の学習が深い学びとなるための授業展開を構想することができた。

このような授業づくりを校内研修を通して実施し、リフレクションしていくことにより、協力校内での授業づくりの一般化が図れると考えている。

4. 今後の課題

(1) 授業改善や指導力向上のための校内研修の推進

協力校では、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習を振り返り、協働して問題を解決することのよさを味わいながら学習に向かっていく「学び続ける児童」を、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を通して育成していくことを、年度当初、学校の努力する課題として考えていた。



授業研究の様子

本研究との関連を考えると、「数学的に考える力」は発展的・創造的に考えることであり、数学的な思考力・表現力を育成していくことで、「学び続ける児童」の育成につながると考えている。

このような理論的な整合性をまず図り、整理し、研究の枠組みを再構築し、教員一人一人がこの研究の方向性を理解し、推進していくことを、平成29年度当初に、校内研修を通して実施していきたい。

(2) 平成28年度協力校における取組内容の再実施

平成28年度取組について、全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施や数学的な思考力や表現力の育成をねらい授業と家庭学習の連携を図った取組、評価テストの工夫については、充分に取り組むことができなかった。

これらの取組は、単元や題材という一定のまとまりの中で、バランスよく題材や育成すべき資質・能力を配置し、計画的に指導する必要がある。

具体的には、年度当初に、思考力・表現力を育成していくための題材・学習活動をピックアップし年間指導計画に位置付ける。授業づくりにおいては、「深い学び」、「対話的な学び」、数学的に考える力である発展的・創造的に考えることをその視点とする。また、本時の学習課題を発展させ、発展課題を授業と同様に解決させるなどの家庭学習課題を児童に与え、評価問題(適用問題)とする。さらに、評価テストにおいては、ピックアップした課題・学習活動を再度出題し、その定着度を確認する。

以上のような取組とともに、単元間に全国学力・学習状況調査問題を活用した授業をトピック的に年間指導計画に位置付け、児童の数学的な思考力・表現力の育成に努めていきたいと考えている。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
平成28年度委託事業完了報告書
【推進地区】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 栃木県塩谷町立玉生小学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

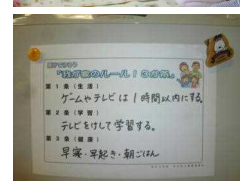
1. 当初の課題

- (1) 心の育成
- (2) 学ぶ意欲の向上・学習習慣
- (3) 学びの質の向上

2. 協力校としての取組状況

(1) 心の育成

- ・本校の学習のきまり「学習のやくそく」の指導を、学年の発達段階に合わせて徹底させた。また、月ごとに重点指導項目を決め「学習のめあて」として掲示して指導した。
- ・学習への集中力を維持するために自主的な体力づくりの実践（100kmマラソンへの挑戦）を行った。業間の終わりの5分には曲に合わせて全校生で走るようにして、走った距離をカードに記録していき、100kmを達成すると表彰して意欲を喚起した。
- ・学級ごとに「はあとの木」の記入を定期的を実施して、友達のよさを認め合いながら、児童の自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築く手立てとした。
- ・学校支援ボランティアを利用し、学年の学習内容に応じた様々な体験活動を充実させることができた。
- ・「我が家のルール」を決める。
- ・長期休業には、「生活チェックシート」による生活点検を行うようにして、「早寝・早起き・朝ご飯」の習慣を身に付けさせようとした。



(2) 学ぶ意欲の向上・学習習慣

- ・算数科では、3年生以上に学習の理解が難しい児童への個別指導の場を確保するための習熟度別学習を実施してきた。各種学力テストの分析の結果、習熟度別学習の支援体制がうまく生かされていないと考え、クラスの分け方や非常勤講師の配置を工夫したり、上位層の児童には思考的なプリント（活用問題）を用意したりして力を付けるようにした。
- ・家庭学習を充実させるために、宿題以外に音読・自習学習を全学年で実施するようになった。めあてや振り返りが記入できる自主学習ノートを全校でそろえて購入し、学習のしかた・内容について指導した。家庭にも通知して協力を得るようにした。（家庭学習の親子学習）
- ・年間3回程度、定期的に家庭学習強化週間を設ける。家庭学習において児童が取り組んだ課題を保護者に目を通してもらい、家庭学習記録表をつけ、1週間単位で励ましのコメントを記入してもらう。同時にノーメディアチャレンジを実施して、テレビやゲームの視聴時間を減らして、学習時間や読書時間の確保に努めた。
- ・「地域の人とふれあおう集会」（学校行事）での活動の様子や子ども及び地域の方の感想を子



ども達の手でまとめ発信した。(冊子・壁新聞等作成)

- ・朝の活動「さわやかタイム」で、週2回の朝読書、週1回の読み聞かせを継続するとともに、漢字や計算・ことばの広場・スピーチなどに組みこませることにより基礎学力の定着を図った。
- ・各学年で作成した、国語と算数の問題を「ステップアップテスト」と名付けて、月1回実施している。国語は漢字や言葉などの言語力を、算数は計算力を身につけることをねらい、短い時間で効率よく身に付くように各学年工夫を凝らして問題を作成した。事前に範囲を提示したり、練習問題に取り組んだりしてから実施した。できなかった問題は、繰り返してチャレンジさせて習熟を図った。それぞれのテストで100点の児童には、満点賞(ミニ賞状)を用意して意欲を喚起した。

(3) 学びの質の向上

- ・校内研修において、全職員が基礎基本の定着と言語活動の充実に焦点をあて一人一研究授業を実施した。授業後の研究協議では、ブロックに分かれて、授業改善に向けて話し合い、学力向上担当指導主事の助言を受けることができた。
- ・県外の先進校を見学し、参観した授業や研究の内容、参考になる取組を報告し合った。そして本校の研究や職員の授業力向上に役立てるようにした。
- ・各教科・道徳・学活などで、話し合い活動を活発化させるために、ペア・グループなどの学習形態をできるだけ多くの場面で取り入れ、言語活動を充実させるようにした。
- ・ノートを使い方の共通理解と指導を実施した。授業において、めあて・まとめ・振り返りなどを、分かりやすく記入して、考えた道筋が分かるノートづくりを進めた。特に算数科の授業の最後には「振り返る時間」を5分確保して、めあてに沿って分かったことを書いたり、次時への課題(もっと調べたいこと・知りたいことなど)を明確にするようにした。そして、家庭でも進んで調べるなど、学習を広げていくような声掛けを行った。
- ・毎朝の活動で「ことばのひろば」(玉生小独自に編修したことわざ、名言集)を音読して、美しい日本語にふれさせ、言語への慣れ親しみを図った。また月1回の集会では「ことばのひろば」にでてある言葉や詩・教材文などを音読発表(クラスごと)したり、聞いたりすることにより、作品に親しみ、言語表現や音読活動への意欲を高める活動を行った。
- ・様々な読書活動を推進した。長期休業日や読書週間には、保護者の協力を得ながら親子読書を行った。親子で同じ本を読み合って感想を伝え合った。リレー読書を実施して一冊の本を読み合い感想を交流した。2学期からは、玉生小「家読の日」を第3日曜日に設定して、豊かな心と豊かな知識を養う読書活動を推進した。
- ・「とちぎっ子学力状況調査」(4年・5年)や、「全国学力・学習状況調査」において、職員研修で問題傾向や本校児童の結果を分析・検討した。学年の弱みや強みを見つけ出して、今後の授業の改善策について話し合った。調査問題は、単元末の「ゆとり」の時間に発展学習として活用できるように年間指導計画の中に綴った。また、「全国学力・学習状況調査」の問題の中から、特に学習してほしい内容を「活用シート」(問題・解説)「チャレンジ問題」(応用問題)として作成し、すぐに授業の中で使用できるように年計に綴り込んだ。



3. 取組の成果の把握・検証

1月に町の学力テストを実施したが、まだ結果が出ていないので、意識調査を基に検証する。児童には「全国学力・学習状況調査」の質問紙を活用し4月・10月・1月に同じ項目のアンケートを3年～6年で実施した。保護者・教職員には、「町の学力向上アンケート」10月・1月を実施した。

(1) 心の育成

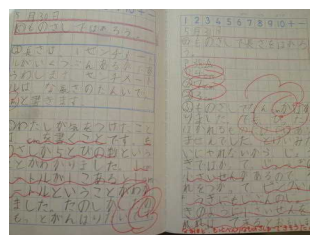
- ・各学年およそ9割の児童が、「学校は楽しい」「学校のきまりを守っている」と肯定的に答えている。また11月に行ったQ U調査においても、6月に比べて各クラスの友達関係が改善され、とてもよい関係が築けているという結果だった。クラスの中での自己肯定感が高まってきていると考えられる。
- ・生活チェックを分析すると、長期休業中、遅寝・遅起きの児童が多いことが分かった。児童アンケートでは、「早寝・早起き・朝ご飯の習慣がしっかりできている」に肯定的に答えたのは75%であり、「早寝・早起き・朝ご飯」の習慣が、十分には身につけていないといえる。保護者の生活も影響していると考えられるので、「我が家のルール」の活用とともに啓発が必要である。

(2) 学ぶ意欲の向上・学習習慣の確立

- ・児童のアンケート結果から、それぞれの学年で平日の学習時間が増加している。保護者アンケートでも「家庭学習が習慣化するように働きかけたり環境整備している」と肯定的に答えている家庭が58.8%と、前回51.5%に比べて若干伸びているので、保護者の意識も高まりつつある。自主学習ノートの利用の仕方を全校で統一したこともあり、保護者が働きかけやすくなった事も考えられる。PTAの折りに自主学習ノートを学年で工夫して展示し、保護者に見てもらおうようにすると、さらに内容に工夫が見られるようになってきた。
- ・平日にテレビを2時間以上見たり、1時間以上ゲームをしている児童は、各クラスの半数以上に上る。4時間以上になる児童もそれぞれの学年において約10%いる。保護者アンケートでは「学習している間テレビを消すなど集中して学習に取り組める雰囲気づくりをしていますか」64.4%「ゲームやテレビ、携帯端末などの使用時間を子どもとしっかり約束していますか」58.0%と保護者の「ノーメディア」に対する意識は低く、「ノーメディアチャレンジシート」などの学習環境を整える働きかけは、まだ不十分である。

(3) 学びの質の向上

- ・「授業で扱うノートには、学習の目標とまとめを書いている」「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の項目で、「はい」と答える児童がどのクラスも増加していた。振り返りを書くことは、当たり前になりつつある。それに伴い、短い時間内に考えをまとめて書けるように児童の書く力も向上してきている。振り返りの内容には、個人差があるので学年にあった「振り返りの視点」を明示して指導するとよい。



- ・朝読書や親子読書などの推進により、学校での読書習慣は定着し、学級文庫の利用や休み時間での読書など本にふれる機会が増えた。しかし「家でよく読書している」に肯定的に答えているのは児童68%、保護者46%と少ない。「家読の日」の推進の仕方があいまいであるとの反省があった。
- ・研究授業の実施や、授業後の熱心な研究協議、学力向上担当指導主事による助言により、教員の意識が高まり、日々の授業実践に生かされている。また、県外の先進校を見学するなど自己研鑽を重ね授業力向上にむけて積極的に取り組む姿勢が見られた。

4. 今後の課題

今年度、学力向上を目指して、考えられる手立てをとり、全職員で協力し合って取り組んできたが、その取組が、効果的であったかどうか、どのように改善するとよいのか、学力テストの結果から検証してみる必要がある。そのためにも1月に実施した町の学力検査や4月に実施される「学力・学習状況調査」「とちぎっ子学力状況調査」の結果をよく分析・検討しなければならない。そして再度、これまでの取組を改良・改善していきたい。

児童の学力を高めるためには、まず子ども達の学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させ、それらを活用して思考力や判断力、表現力を育成するための授業づくりは欠かせないものである。日々の授業を大切にして学力を積み重ねていきたい。さらに、学校と家庭・地域が、それぞれの役割を果たし、連携・協力していくことも重要である。信頼関係が築けるよう取組んでいきたい。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 28 年度委託事業完了報告書

【協力校】

| | | | |
|-------|-----|----|----|
| 都道府県名 | 栃木県 | 番号 | 09 |
|-------|-----|----|----|

| | |
|------|--------------|
| 協力校名 | 栃木県足利市立毛野小学校 |
|------|--------------|

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成 27 年度全国学力・学習状況調査結果

| | | | | |
|-----------------|------|------|------|------|
| 全国の平均正 答率との差 | 国 A | 国 B | 算 A | 算 B |
| | -5.6 | -8.9 | -6.1 | -6.1 |

- (1) 平成 27 年度全国学力・学習状況調査から、国語 B は全国と比較すると -8.9 ポイント、算数 B は -6.1 ポイントであり、活用問題において低い傾向にある。また、国語 A、算数 A についても、全国平均を -6 ポイント近く下回っていることから、基礎的な知識、技能の習得や思考力、判断力、表現力等に課題が見られる。
- (2) 平成 27 年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問調査の結果から、自分に自信がもてない児童が多いことがわかり、自己肯定感の育成が必要である。
- (3) 平成 27 年度全国学力・学習状況調査、児童生徒質問調査の結果から、自主的な家庭学習が身に付いていない児童が多いため、家庭学習の習慣化が課題である。

2. 協力校としての取組状況

| | |
|------|--|
| 研究主題 | 「学び合い高め合う子どもの育成」 ～基礎基本を生かした問題解決能力を育てる指導の工夫を通して～ |
|------|--|

(1) 指導方法・指導体制の工夫改善

- ① 全国学力・学習状況調査、とちぎっ子学習状況や調査本市独自の調査等の結果を踏まえた授業改善や指導の充実を図る。
- ② 個に応じた指導（少人数指導、個別指導、繰り返し指導、教師間の協力的な指導など）による指導方法・指導体制の工夫改善
- ③ 言語に関する授業規律や学習規律（書くこと、話すこと、聞くこと等を重視した授業、ノート指導など）の実践
- ④ 保護者との連携（家庭学習のお願い、学校だより、PTA 学年部会等での周知、協力依頼）

(2) 教師の資質能力の向上【自学自習】

- ①授業を自ら改善しようとする主体性 (※訪問研修)
- ②自らの課題を踏まえ、他から学ぼうとする受容性
(※訪問研修)
- ③教材に対する理解を深めようとする専門性
- ④1時間の授業から年間通して行おうとする継続性



※【訪問研修について】

- ・ 全員が研究主題から自分の課題を決めて、研修先を探して訪問
(「国・社・算・理」から)
- ・ 関東地方 (教育風土に共通点が多いので取り入れやすいため。)
- ・ 単独で訪問を原則 (自学自習)
- ・ 研究授業を行った結果、課題等が明確になったら、更に研究を深めるために、再研修先を決めて訪問
- ・ 指導者：県教委(吉田指導主事・竹前指導主事)・市教委 (青柳指導主事) 他
(事前、事後指導、日常訪問等も含む)
- ・ 研修先で参考となった実践を取り入れて研究授業を実施する。
(指導案は、本時のみの略案)
- ・ 研究授業は、学年主任以外全員が行う。学年主任を中心に学年単位で取り組む。

【取組の経過】

- ・ 9月 研修先を決めて、教頭へ報告
教頭・校長が研修先と交渉 訪問校決定
- ・ 9月～ 研究推進委員会を中心に学力改善プランの確認とステップアップに取り組む
- ・ 10月～ 訪問研修 (訪問の記録記入)
市教育委員会に訪問して指導案の検討
- ・ 11月28日 (月) 授業研究会・分科会・全体会
29日 (火) 授業研究会・分科会・全体会
- ・ 12月～ 訪問研修 (訪問の記録記入)
- ・ 12月21日 (水) 指導主事訪問 授業参観

- ・ 1月23日 (月) 指導主事訪問授業参観・指導案の検討
- ・ 2月 8日 (水) 授業研究会・分科会・全体会
- ・ 9日 (木) 授業研究会・分科会・全体会
- ・ 3月～ 平成28年度の成果と課題の確認 次年度の計画等

3. 取組の成果の把握・検証

- 研究主題に基づいて、教師各自が個人の課題（資料1）をもつことができた。
- 課題を解決するために学校訪問研修（全職員）をし、研修校の指導を学んだ。

（資料2）

- 実践校の取組を学ぶことで指導意欲が向上した。
- 教師各自の学びを「参考となった実践等」で生かすことで、授業が変わり、積極的に学習に取り組む児童が増えてきた。
- 実践を振り返り（資料3）、次の課題につなげることでさらに教師の実践意欲が向上した。
- 県教委、市教委、多くの指導主事による学校訪問の回数も増え、指導主事と教師との関わりが多くなり、指導意欲の向上につながった。

先進校訪問研修にむけて

○学校の課題

児童の課題

- ほとんどの児童が学校が好きと感じている。
- 「習題」として出された学習をまんまと行っている。
- 半授業で決められた課題の組、自分で考えて学習する児童が少ないが自主学習として授業や学習をする児童が少しずつ増えている。
- 自分にはよいところがある、自分ばかりの人の役に立っていると感じるなどの自己肯定感や自己有用感が低い。
- 次だの順で自分の考えや意見を発表することに苦手意識がある。
- 授業で自分の意見を発表する機会が与えられていないと感じている児童が少なくない。
- 個別指導が必要な児童がどのクラスも少なからず存在している。

教師の課題

- 低学年の多い50代の先生と学年の2人代の先生が多い。
- 学年の先生は、みな熱心な子どもに向き合い、日々の授業に取り組んでいるものの、自分も十分な学習指導ができていると感じている面もある。このため、児童が少ない分を年齢の学年主任が教えたり助けたりする関係性を生かして、日々の教育活動を行っている。

○教師（個人）の課題

- 児童に親身・柔軟の姿勢を立てさせ、児童の考えを基に学習を促したいと考えているが、なかなか予想を立てることができない。予想を立てさせても、理由を聞くとなぜかうまくいかなかったりなど、今までの学習や生活経験についての考えを上手に引き出すことができない。
- 家庭や授業を行っているが、それが何を覚めるための練習・実験なのか子どもにも理解させられていないことがある。
- 教師自身の授業になってしまい、児童の主体的な学びになっていない。

資料1

訪問の記録

28年 11月 22日 (火)

| | |
|-------------|--|
| 訪問校名 | 地を町立 地を小学校 |
| 学校の概要 | 町の中心部にあり、11年制基礎教育の中心校である。平成17年度に22年度の2年間、国立教育研究開発院教育実践研究事業を受け、実践研究の研修を行っている。 |
| 取組（研究内容） | 問題解決の過程の中で、「手帳」「身帯」の割合に児童を合わせた指導を実施することにより、児童の思考力・表現力の向上を図っている。 「理解の深まり」「理解のスピードの速さ」について全校で統一した指導を実施し、児童の理解の深まりや、学習意欲の向上を図っている。 「個別指導の活用」を主として、児童・教師の理解の深まりや学習意欲の向上を図っている。 |
| 教科・学年 | 国語 1年 |
| 選定の理由 | 授業の中で、読解や読者の思考を促す指導を行っているが、なかなか手帳が立てられなかったり、手帳はたてても、目標をもって読解を進めることができなかったりすることが多いという課題があった。そこで、「児童の思考力・表現力」に児童を誘った実践を学ぶことにより、児童が自分の考えをもと、目標をもって読解することができるようになることを期待して訪問した。 |
| 訪問の趣意 | 読解からの一歩手前で行けなかったり、児童が読者の気持ちの理解が困難な場面を立っていた、児童の思考を促す実践を学ぶことで、自分の学習指導に活用したいと考えた。 |
| 参考となった実践等 | 読解からの一歩手前で行けなかったり、児童が読者の気持ちの理解が困難な場面を立っていた、児童の思考を促す実践を学ぶことで、自分の学習指導に活用したいと考えた。 |
| 感じたこと・考えたこと | 授業の中で読解が、今日の授業は読解を促す実践を学ぶことができた。手帳が立てられなかったり、手帳はたてても、目標をもって読解を進めることができなかったりすることが多いという課題があった。そこで、「児童の思考力・表現力」に児童を誘った実践を学ぶことにより、児童が自分の考えをもと、目標をもって読解することができるようになることを期待して訪問した。 |

資料2

授業の振り返りと今後の実践

11月22日(火) 1年国語 読解 読者の気持ちの理解

教師名 尾野 隆行

児童の課題

- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。

教師の課題

- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。

今後の実践

- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。
- 読者の気持ちの理解が難しいと感じている児童が少なくない。

資料3

- 学力向上改善プランがステップアップした。

- ・家庭学習の手引きの改善（低、中、高ごとに自主学習の手引きを改良）できた。
- ・「話し方の話型」資料を作成し各教室に掲示することができ教師の共通理解ができた。

- 活動の目的を明確にした。

「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「お互いの考えを深める」「学習内容などを振り返る」それぞれの活動において自分が取りいれて実践していく指導を明確にし実践をする。

「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「お互いの考えを深める」「学習内容などを振り返る」それぞれの活動において自分が取りいれて実践していく指導を明確にし実践をする。

4. 今後の課題

- 「毛野小ベーシック」のそれぞれの活動において自分が取りいれて実践していく指導を明確にし実践をする。
- 課題にあった実践校を探し、計画的に訪問をし、「参考となった実践等」をさらに進めていく。
- 保護者との連携を強化し、家庭学習の手引きをさらに実践していく。
- 全職員が学習規律の共通理解をさらに深めて指導していく。